

魚眼レンズ

「自分の作品がミニマル・アート(最低限芸術)に影響されているのは確かだと思ふ」。淡々と話す山内盛博さん。宜野湾市大山に画廊匠が装いを新たにオープンしてから八カ月が過ぎたが、一九八六年度の締め役で二十八日まで山内さんの個展が開かれた。



山内盛博さん

作品は「SUKIMA」シリーズから八点。琉大で学んでいたころはセザンヌにひかれ、静物画などを描いていたがさまざまな経緯を経た現在のシリーズは制作に入って四年余になる。ベニヤ板の上に間隔を置き、スクリーンを張る。その上に幾何学的図形、直線、曲線で分割された面に着色。二重の構造にして、一つ

の作品に構成、色彩、視角によるさまざまな変化を持たせている。

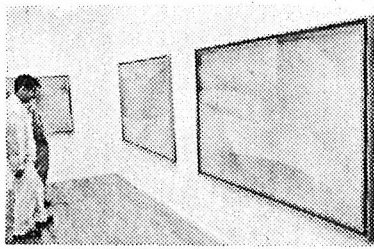
「ミニマル・アートは袋小路に入った、などと言われるが、絵画史の最後の地点に依然として存在し続けている。やり残されたことはまだある。モチーフを見せるのではなくて、アートが主題とすべきものがあるはずだ」。現代美術を彩るニューペインティングやインスタレーションといった様式の一歩手前で踏みとどまって、独自のアートを模索する。

アートが主題とすべきものを

今年九月、永津嶺三さん、新里義和さんらとともに名古屋で個展を開いた。そこで展示した「SUKIMA」シリーズの一点が「美術手帖」十二月号で紹介された。作風、手法とも県内若手の中では特異な存在である。



山内盛博SUKIMA展 (9日~28日、画廊匠) 沖縄市にある越来中学校で美術

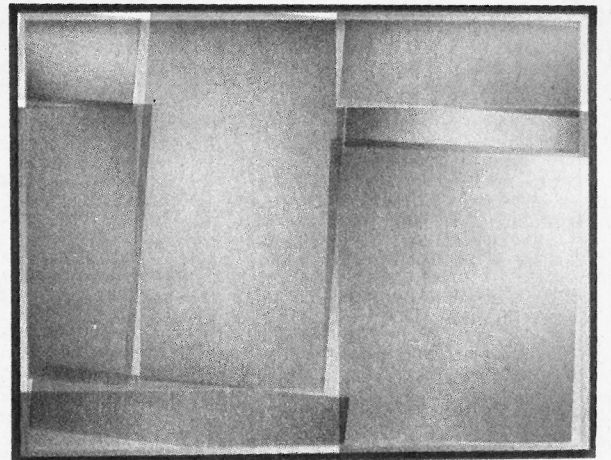


を教える山内さんの個展。作品は「SUKIMA」シリーズから八点。写真。ベニヤの上に三センチ程の間隔を置き、スクリーンを張る。両方に幾何学的図形を描き着色した二重構造の作品は見る者の視点によって変化する。今回は、三角や四角といった幾何学的図形ばかりでなく曲線、直線で分割した二重構造

の新傾向の作品も登場している。



<12月>



SUKIMAシリーズ 山内盛博

作風の遍れきをたどる

山内盛博のSUKIMA展。会場に彼の作風のうつり変わりがファイルされていた。細心に対象を描写した具象画からスタートした彼は変わり身のはやきにつかれたように作風の遍れきをたどる。商店街、建物など街のシリーズ、灰色のモントーンの路面、ネガフィルムのように逆転した情景、しらしらと立つ電柱と標識等を、一変してシルクスクリーンプロセスを思わせる原色の人物像。そして近作の二重構成のSUKIMA。めまぐるしい変わり身を見た。このシリーズ、強いトーンの色調に発して、しだいに「淡色」に移行しつつあるように思ふ。模索して得たこの作風、今や山内独自のものとなって注目をあつめている。

—— 与儀 達治 ——